

### 17. 片側性股関節疾患における $^{99m}\text{Tc-MDP}$ の患側大腿骨骨幹部への取り込み亢進について

小林 英敏 柴田 清治 田中 孝二  
 (岐阜県立多治見病院・放)  
 室 捷之 (同・整外)  
 佐久間貞行 (名古屋大・放)

昭和60年4月から平成元年4月までに岐阜県立多治見病院にて、骨シンチを施行した片側性股関節疾患症例73例(84検査)を対象として、 $^{99m}\text{Tc-MDP}$  の大腿骨骨幹部への取り込みを健側と患側とで比較した。対象は、頸部骨折21例、脱臼6例、大腿骨頭壊死16例、変形性股関節症30例である。3時間後像での  $^{99m}\text{Tc-MDP}$  の患側への取り込みは、71検査で亢進していた。単純レントゲン写真と比べ合わせると Osteoporosis のためと考えた。早期像を撮影している症例の多くは、患側への取り込みは低下しており、患側の不使用が考えられた。

### 18. Deconvolution Analysis による閉塞性腎疾患の評価

小野 元嗣 野村 新之 大井 牧  
 伊藤 綱朗 竹田 寛 中川 毅  
 (三重大・放)  
 寺田 尚弘 (山田日赤病院・放)  
 前田 寿登 (保衛大・放技)

閉塞性腎疾患患者を対象として  $^{99m}\text{Tc-DTPA}$  Renoscintigram を行い、Deconvolution Analysis により求めた伝達関数のパターン分類、および算出された平均通過時間 (MTT) と糸球体濾過率 (GFR) による腎機能評価の有用性につき検討を行った。伝達関数は4つのパターンに分類され、I型はレノグラムの M1 パターンに、II型は Mm パターンに対応するものと考えられた。III型とIV型は M2 パターンに対応すると考えられたが、それらの MTT に差は見られず、違いは GFR にあり実質障害の差によるものと思われた。I型、II型に分類された症例の中にも GFR 値の低い例が認められ、レノグラムには反映されない実質障害が伝達関数で表現され、その有用性が示されているものと考えられた。

### 19. 腎透析患者の二次性副甲状腺機能亢進症 —— $^{99m}\text{TcO}_4^-$ , $^{201}\text{TlCl}$ による評価——

深津 博 伊藤 健吾 池田 充  
 石垣 武男 佐久間貞行 (名古屋大・放)  
 天野 泉 (中京病院・透析)

昭和62年4月から平成元年4月までに名大病院にて  $^{99m}\text{TcO}_4^-$ ,  $^{201}\text{TlCl}$  によるシンチグラムを受けた26例を対象とした。このうち13例は腎透析中の二次性副甲状腺機能亢進症で、シンチグラム検査後副甲状腺全摘術が行われた。残りの13例は、手術的に正常の副甲状腺が確認されている症例で、対照群とした。各症例の甲状腺の左右上下4か所について、腫大した腺の有無を4名の放射線科医が5段階評価で回答した。4人のおのおのについて ROC 解析を施行した。4人中3人で 500 mg を超える群と 500 mg 以下の群で検出率に有意な差が見られた。血清 PTH 値、血清カルシウム値、透析年数とシンチグラムの検出能の間に有意な相関を認めなかった。

### 20. 昇圧化学療法時の腫瘍血流量の核医学的評価

中島 鉄夫 外山 貴士 周藤 裕二  
 岩崎 俊子 前田 正幸 木村 浩彦  
 徳田 康孝 河村 泰孝 林 信成  
 小島 輝男 石井 靖 (福井医大・放)

目的：アンギオテンシン-II (以下 A-II) 注入下の昇圧化学療法時の腫瘍血流の変化を核医学的に検討した。

症例および方法：肝転移2例、仙骨転移1例(原発：胃、結腸)。全例腫瘍の栄養動脈にカテーテルを挿入、 $\text{Kr-81m-Tc-99m-MAA}$  と A-II (2  $\mu\text{g}/\text{min}$ ) を並行して注入した。

結果：全例において腫瘍血流は A-II 注入に伴って増加したが、化学療法後の筋炎や手術創部の線維化・癒着が強度に存在すると思われた症例では、それらの部位にも腫瘍部をしのぐ血流増加が見られた。

結語：昇圧化学療法施行時には炎症病巣への抗癌剤集中の可能性を考慮に入れる必要がある。